

# ヨーロッパ・アメリカ大学の成立と発展

—大学人は何を考え何を行って来たか—

岡村 精 一

## I

スウィンバーン (Algernon Charles Swinburn) はその作品のなかで、キリスト教によってヨーロッパの中世は灰色になった、と述べた。併しながら、その時代にイタリアやフランスにおいて、今日における世界の大学の萌芽はめばえ始めていた。

当時イタリアは世界の中心であった。サラセンの興起に続き、十字軍の遠征となり、それらにより西欧人はキリスト教文化のほかに、継承されたギリシア・ローマ文化、アラビア文化、ビザンチン文化、特に法学、地理学、医学に驚き、それらに刺激をうけ、近代ヨーロッパ文化の誕生は促された。イタリアは十字軍の通路にあたり、東西文化の接点であり、商工業都市の発達が著しく、それら諸都市は文化の向上、充実に努めていた。

その頃イタリアは法皇と王権が封建社会の頂点をなしていた。

キリスト教は異邦人の使徒パウロ (Paulo) などにより、ヘレニズムに基調を置くローマに伝来、度々の激しい争いの後4世紀始め(313年)に公認されるに至り、その後11世紀中頃(1054年)、信仰と宣教の中心をなしたローマ・キャソリック教会とギリシア・キャソリック教会の分離となったが、それらには、他の中心教会を含め、付属僧侶学校ないし学問所が設けられ、神学と伝教法が研究されるようになった。

政治的には、ドイツ皇帝 (Otto I) がイタリア国内の紛争に干渉、法皇の保護者として10世紀の後半(962年)ローマに入り、法皇より神聖ローマ皇帝として加冠された。11世紀中頃にはノルマン系王国の成立を見、12世紀末頃にはドイツ王 (Friedrich II) がイタリア王権を一本化した。

その頃イタリアには、法皇より自由権を勝ち得た自由都市コムネ (Commune) が発達し始めた。これはその後ドイツに起った自由都市 (Frei Städte) とは少し性格を異にするものであるが、フィレンツェ (Firenze), ジェノバ (Genova), ベネチア (Venetia) などが繁栄した。いずれも法律を持ち、都市国家的性格のもとに地方分権的に競い合い、内には商工業者のものを中核とする多種のギルドが結成され、都市活動の起動力となっていた。またこのような諸都市は学校、大学などの誘致、設置にも努め、中・高等教育機関としては、スツディウム・ジェネラレ (studium generale) が設けられ、法皇ないし国王の公認のもとにあった。これはスツディウム (studium) の一般化されたもので、特定地域住民のためのみでなく、他地域の学徒も受け入れ

たものを意味した。

11世紀後半より12世紀にかけ、南伊のソレルノ（Solerno）には医学校があり、その名を知られていた。この医学校は大学になる機運は芽ばえず、その後の西欧大学に影響を与えることなく、19世紀始めまで存在し、その後は姿を消した。

北伊ボローニア（Bologna）市には国際的紛争がしばしば起り、法律研究と法的解決が要望されていた。そのような社会事情よりして、この地に多くの法学者が集った。特にローマ法の権威であり、近代法学の創始者と言われるイルネリウス（Irnerius）はこの地にスツディウム・ジェネラーレを興し、ローマ法を講じていた。その後この施設には教会法の研究も加えられた。この学校は法学中心であったが、13世紀（1200年）になり、医学・哲学部も新設され、14世半頃（1350年）には神学部も加えられた。ボローニアのこの4学部制は、その後の西欧大学のあり方に大きな影響を与え、その原基、プロトタイプとなった。

ボローニアにはイタリアおよびヨーロッパ各地より学徒、研究者が数多く来学したが、外部地域の他国よりの留学生は生活と身分の保障の確保を求め、ユニベルシタス（universitas）を形成した。これは学生組合であり、ギルド的性格を持つものであったが、12世紀半頃（1158年）神聖ローマ皇帝（Friedrich I）の公認をうけた。教師達は一応、ボローニア市民として認められ、保護も受けていたので、生活上の支障はなく、学生組合と深い関連はなかった。このユニベルシタスは単独に呼ばれることはなく、学生ユニベルシタス（ユニベルシタス・スコラリウム univesitas scholarium）ないし、パリー大学の場合の如く教師と学生のユニベルシタス（ユニベルシタス・マジストロルム・エ・スコラリウム universitas magistrorum et scholarium）などと言われた。このようなユニベルシタス制はイタリア学園に広く行われ、今日のユニバーシティ（university, université, Universität）の語源をなしているのであるが、これが本来の組合の意より離れ高等教育機関そのものを表わすに至ったのは13—14世紀以後のことである。

ルネサンス（Renaissance）はイタリアに起り、中世世界より離脱、近代の太陽の昇高となり、思想、学問、芸術、宗教、政治、社会生活に新鮮潑刺とした新風をヨーロッパに吹き入れたが、イタリア大学もこれに呼応した活動を見せた。

ボローニア大学は現在11学部、学生数約2万を算えているが、このほかにも30に近い大学がある。そのうち主要なものは、北部よりトリエステ、パトバ、ミラノ、トリノ、パビア、ジェネバ、フィレンツェ、ピサ、ローマ、ナポリ、パレルモ、カタニア、カリアリ（Trieste, Padova, Milano, Torino, Pavia, Geneva, Firenze, Pisa, Roma, Napoli, Palermo, Catania, Cagliari）などである。

イタリアの大学について思うことは、知識人であった大学人が学生と共に大学を設け、みずからの学問研究をその諸活動の原点として堅持し、困難のうちに道をきり開いて行ったことである。言うまでもなく、中世より強大であった宗教そして政治を無視することはできず、それらと直接間接連繫するところはあったが、みずからの道を見失うことなく精進した姿は、その後、教権と国権と共に、学問権威という三権確立の基盤を形成したものと言うべく、そこには大学運営

における近代的企業性などは全く見られなかった。

## II

フランスでは、中部モンペリエ (Monpellier) の医科大学が古く、12世紀初期 (1125年) に創設され、今日に至っている。

パリ大学 (Université de Paris) は12世紀後半 (1150年より1170年の間) に設立された。それ以前パリにはノートル・ダム寺院系とサント・ジェネビエル系統の寺院学校があり、パリ大学は前者と深い関連を保ちつつ、次第に分離、独立した。ノートル・ダム寺院の学問上の責任者が一切の教育免許を発行していたが、教師や学生達は自立を求め、知的に教える力のあるものに教える権利を与えと要望し、教師と学生の組合、ユニベルシタス・マジストロルム・エ・スコラリウムを結成し、法皇の保護を願った。13世紀 (1200年) になり、王 (Philip II) はこの大学に特権を与え、13世紀初頭 (1208年) 法皇 (Innocent III) はこの大学に大学規則の作成を許した。このようにして次第に大学としての形態を整えて行き、ユニベルシタスが大学の意に用いられるようになった (1219年)。このユニベルシタスはイタリア大学におけるものとは少し異り、教師を中心とし、これに学生達が参加した点が注目される。

12世紀の僧院学校の場合も同様ではあったが、パリ学校はヨーロッパ全域の最もすぐれた学者達を惹きつけ、学生の来学する者も多数であった。教師も学生も初期の頃は聖職者が多く、キリスト教そして教会と大学との関連が強く、両者の間に連繋と紛争が断続した。併しながら、13世紀末期より14世紀にわたり、パリ大学は全キリスト教界の教育、特に神学そして哲学の中核であった。

4学部 (教養・法学・医学・神学部) 構成の下に、教養学部においては3学科 (trivium) (文法、修辞学、論理学) と4学科 (quadrium) (算術、幾何、音楽、天文学) のほかに、科学、文学なども教えられた。教養学部の教師及び学生達は、その出身地に従い、4地方別になっていた。

学生達には多くの学寮が設けられたが、その一つがソルボンヌ (Université de Sarbonne) であり、始めは有富でない神学々生のためのもので、13世紀中頃 (1253年) に始った。

ルネサンス、それにより神と信仰中心の中世文化は人間と知識探求の近代文化に転換し、個人の解放と自由の発見となったのであるが、パリ大学も影響を蒙り、関連はあった。けれども、宗派と教会との紛争がうち続き、十分なそして直接的な成果はまだ収められなかった。

宗教改革に際しては、その紛乱が大学にも波及し、大きな動揺を来たした。この頃、フランスのみではなく、ドイツなどにおいても同様ではあるが、近代国家の成立と共に、大学は宗教と国家勢力に左右されるところが多くなり、自由な知的活動は阻害され、従来よりの独断に落ち入ることになった。併しながら、この前後より、パリ大学はようやくその確固とした組織を持つようになった。

フランス革命においては、パリ大学は大きな変容を来たし、旧体制アンサン・レジウムは一掃され、従来の総合大学制は廃止され、特殊、専門の単科大学群に改編され (1793年)、文理の両単科大学その他となった。この改変は革命為政者の意図するところではあったが、大学人もまた

これに直接間接参画した。ナポレオン時代（1806年）、行政機関としてのフランス大学が設置され、すべての教育機関は再編された。これはその前年の政令に基くもので、フランス全国を24大学区（アカデミー）（academie）に分け、各大学区に官選の学長が配され、4学部（法学、自然科学、文学、医学）より成る一大学を持ち、その他の専門教育機関なども備えられた。このようにして、パリー大学はパリー大学区の大学として、その地位を占めるに至った（1851年）。これらの学部のうち神学部は19世紀末葉と20世紀初頭の2度において廃止され、科学や薬学部などが新設された。20世紀中頃には、法、医学、薬学、科学、文学などの学部が主として活動し、当時学生数は1万を越え、現在は約10万であり、科学と知識の殿堂としての名声を回復した。今日、共学であり、フランス全国を始め、フランス影響下の諸国その他よりの来学者も多い。

フランスにおいては国家よりの管理が甚だ強く、パリー大学総長は文部大臣の任命である。今日アカデミーは23、大学を備えているものは19である。現在のフランスの大学の主要なものは、北部に、パリー、カン、ナンシー、レーヌ、ストラスブール、リール（Paris, Caen, Nancy, Rennes, Strasbourg, Lille）、中部に、ディジョン、ポアティエ、モンペリエ、トゥールーズ（Dijon Poitiers, Montpellier, Toulouse）、南部には、グレノーブル、エクス・マルセーユ、ボルドー、ベサンソン、クレルモン・フェラン、リヨンなどである（Grenoble, Aix-Marseille, Bordeaux, Besaneon, Clermont-Ferrun, Lyon）。

フランスの大学、特にパリー大学の他と異なる点は、中世学問の基盤であったスコラ哲学の生成に関連が深いことである。スコラ哲学はキャソリック教義を総合し、新しい価値に体系化したものであるが、このことにパリー大学は大きな役割を演じたのである。

パリー大学はキャソリックと深い関係にあったが、それからの独立には長い歩みを続けなければならなかった。併し遂に、フランスでは国家と教会が分離することになり、パリー大学では神学研究を廃止するに至った。今日のフランス人の90%がキャソリックである事実よりして、まことに注目に値する。

パリー大学は、ポローニア大学と共に初め4学部制をとり、総合的学問研究に努め、一時中断したが、総合性の価値を再確認したのであった。

パリー大学の学寮制も他の国々、特にイギリスのオックスフォード、ケンブリジ大学などに大きな影響を及ぼした。

ローマ文化の正しい継承者、そして発展者はフランス人と言い得る。ローマ文化の普遍性、実際性、抽象性はよく伝承され、明快な推理、批判的知性、具体的実証主義、調和と美の感性はフランス文化の中軸である。また巧緻な芸術・自由・平等・個人主義は独自の発展である。こうした成果にフランス諸大学の大学人が参与したと言い得る。

### III

ドイツ大学の成立にはやや後進性が見られるが、その後特色ある独自の発達を遂げて、ヨーロッパ諸大学に多大の影響を与えた。フランス人がローマ的なものよりフランス的なものに展開し

て行ったと同じ様に、ドイツ人はゲルマン的なものよりドイツ的なものに発展して行った。このことは、ドイツ大学についても言い得るのである。

古都ハイデルベルヒ (Heidelberg) 大学はドイツ最古のものであるが、14世紀末近く(1386年)になり、プファルツ選挙侯 (Ruprecht I) により創設された。これはパリ大学に範をとったと言いが得るが人文主義 (Humanismus) に立脚する学風であった。宗教改革時代にはこの人文主義に基調する新教主義の大学となり、その名をヨーロッパに知られた。17世紀後半における30年戦争の時代には不振となり、一時閉鎖されたこともあり、18世紀には旧教大学に変身もした。現在、5学部、1万人以上の学生を擁している。

ゴシック建築のケルン (Köln) の大聖堂には中世より教会学校があったけれども、ケルン大学の前身校はアカデミー (Akademie) としてケルン市により、14世紀末近くに (1388年)、王 (Urbanus VI) の勅許に基いて設立された。これはプラハ (Praha)、ウィーン (Wien)、ハイデルベルヒの場合と同じ様に、パリ大学をモデルとしたものであった。創立時代はハイデルベルヒよりもその名を謳われたが、その後後退した。18世紀末 (1794年) 仏軍の侵入を見、一時閉鎖された (1798年) が、本格的大学として20世紀の始め (1919年) 再出発した。現在、5学部、2万人に近い学生数を収容している。

ライン川に近いボンの大学 (Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität) の前身校はアカデミーとして、18世紀終りに (1777年) 創立されたが、数年後 (1784年) 神聖ローマ皇帝 (Joseph II) により勅許された。その後 (1790年) ナポレオン侵入により、廃校となったこともあるが、19世紀初め (1815年)、その王 (Friedrich Wilhelm III) により学術の中心とする構想の下に再建された。現在、7学部、1万5千人の学生が研学している。

以上の諸大学に前後して、15世紀には、伝統的なライプチヒ、その他ロストック、グライフスワルト、チュービンゲン、フライブルグ、ミュンヘン (Leipzig, Rostok, Greifswald, Tübingen, Freiburg, München) の諸大学、16世紀には、マールブルグ、ケーニヒスブルグ、イエーナ、ハレ (Marburg, Königsberg, Jena, Würzburg) の諸大学、17世紀には、ギーゼン、キール、ハレ (Giessen, Kiel, Halle) の諸大学、18世紀には、ゲッティンゲン、エルワンゲン (Göttingen, Erwanen) の諸大学が相次いで設立された。ドイツ大学が一般に新時代的大学として発足、成立されたのは18世紀以後のことである。

ベルリン大学は19世紀始め (1809年)、ドイツ近代大学として創設された。これは、近代国家の樹立にともない様々な要望も入れ、ドイツ的特色を見せたものであった。

ベルリン大学はプロイセン王 (Friedrich Wilhelm) により創立されたが、既に18世紀末より設置の機運がきざしていた。当時プロイセンは戦争の敗退で物質力を失い、精神力でこれを補おうとしていたし、ハレ大学の喪失でいよいよベルリン大学設置の意は固まった。

従来は、ドイツ大学においても、神学部が学内で優位を占めていたが、ベルリン大学においては、神学研究を排し、中世的アリストテレス (Aristoteles) より離脱した哲学研究を中核とし、真理探求と創造的究明を基本課題とするに至った。また医学、法学、その他の科学も学問体系上

重要視したけれども、そうした諸科学を哲学の下に統一する構想にあった。更に一方において、国家と宗教より学問研究の自由を確立するのに努め、特にベルリン大学では大きな成果を収めた。研究用語はそれ以前ラテン語中心であったが、主としてドイツ語使用に踏みきった。学内においては、教授団体である教授会を中心勢力とする学部制 (Fakultät, Facultas) を重視した。この学部制はパリー大学でも採っていたが、フランス革命で一時崩壊し、ドイツ大学のこの確立、そしてそれに続く成功で学部制に戻ったのであった。

ベルリン大学の創立に当って、カントの主観念を形而上学的、倫理的に展開した哲学者フィヒテ (Johann Gottlich Fichte) は、その前年、設置計画を立案し、また新教神学の祖であり、哲学者であった、シュライエルマッヘル (Friedrich E. Schleiermacher) は意見書を起草、提出した (1808年)。フィヒテは初代総長となったが (1810年)、次の三綱領を提起した。

- 1, 教育と研究体制を確立し、権力的統制を排除する。
- 2, 大学の自治運営を目指し、その中軸を教授会に置く。
- 3, 哲学を特に重視し、哲学を中心として諸科学を統一する。

このベルリン大学はその後特異な大きな発展を遂げ、ヨーロッパ諸大学の1つの典型となったが、第2次世界大戦後は東ベルリンに位置し、ベルリン・フンボルト大学 (Humboldt-Universität zu Berlin) となっている。現在、9学部、学生は1万3千人である。

なお西ベルリン地区には、現在、ベルリン自由大学 (Frei Universität Berlin) が設置され (1948年)、6学部、学生1万5千人を収容している。

なお、20世紀になって設立されたドイツ大学としては、フランクフルト、ハンブルグ、ミュンスター (Frankfurt, Hamburg, Münster) を算えることができる。今日、西ドイツには二十に近く、東ドイツには十に近い大学が設けられているが、すべて国立である。

ドイツ大学で注目されることは、学部制を堅持したが、これは特に普遍性、総合性を重視する学問体系の見地よりする点である。学部制は仏、英大学等にも行われて来たが、ドイツ大学では、上記の点が特に厳格に堅持されている。

伊、仏大学にても中世よりそれを目途として来たが、宗教的法皇権、政治的王権と共に大学による自由な理想の学問研究権が、多くの困難を排除しつつ、よく確立され、そして見るべき成果を収めたのはドイツ大学であったと言い得る。併しながらドイツ人は一般に、個と共に全体を重視し、国家存在の価値を是認することよりして、国家よりの大学への管理的影響の全面的否定、国権よりの完全な離脱を求めたのではなかった点は留意されなければならない。

日本の大学は明治初年に始まるが、これは主として独、仏大学に範をとり、構想されたものである。(第2次世界大戦後はアメリカ大学の影響が顕著である。)

#### IV

オクスフォード大学 (Oxford University) はイギリス最古であるが、その前身校は9世紀、サクソン王 (Alfred the Great) 時代より存在し、12世紀後半になり、時の王 (Henry II) によ

り当時存在した諸学校が集大成され、スツディウム・ゼネラーレとなった。始めの頃、学生達と町の住民の間には紛争が続いたが、14世紀中頃(1355年)、時の王(Edward III)により、学生に特許状が与えられた。

オクスフォードの特色ある学寮、コリジ(college)は14世紀半頃(1346年)設けられ始めたが、本来は富有でない学生対象のものであった。これはパリー大学の組織を受け入れたものであるが、パリー大学よりここに移動する学生もあり、次第に盛大となって行った。そして、このコリジ制は特色ある発達を遂げ、全寮制になるに及んで、貴族の息子達も、それぞれ執事(butler)を伴い、コリジに起居し、自治的統制のある学生生活を送り、学生はスポーツにも励んだ。各コリジには個人的指導教師(tutor)が研学の助言、指導に当り、学生はホールで会食したり、合同教育も受けた。花咲く中庭も運動場も備っていた。このようなコリジ制により、オクスフォード特有の学生教育、紳士養成は大きな成果を収めた。

オクスフォード大学の学生生活については、みずからも同大を卒えたゴルスワージー(John Galsworthy)の「ホーサイト家年代記」(The Forsyte Chronicles)のうち、「現代喜劇」(A Modern Comedy)や「章末」(End of the Chapter)に描かれ、またみずからも同大卒のローズ・マコーレ(Rose Macauley)の「危険な年頃」(Dangerous Age)のなかにも記されている。前者においては、ビクトリア女王時代より第一次大戦前後のオクスフォード大学学生生活と共にイギリスの社会事情、後者においては大学卒女性の生き方についての記述に興味を覚える。

オクスフォードでは、始めの頃、教養的、基礎的な7自由科目が中心であったが、次第に自然科学、倫理学、形而上学などが加えられて行った。

14世紀後半、イングランド最初の宗教改革運動者ウィクリフ(John W. Wycliffe)はここの教授であった。19世紀には、ニューマン(John Henry Newman)がここの人となり、オクスフォード・ムーブメント(Oxford Movement)を展開し、旧教復興と英国教会遵奉が呼ばれた。

19世紀後半よりは、産業革命の波が大学にも波及し、大学を圍繞する学外社会人の「必要」に即応し、次第に職業的、専門的学問も加えられた。

現在、女子学寮を含み、20に余るコリジを持ち、1万の学生を擁している。

ケンブリジ大学(Cambridge University)は、オクスフォードと共に古い歴史を持つが、12世紀末葉、オクスフォード大学の教師と学生の一部がここに移り住むようになり、13世紀始め、教師のユニベルシタス(universitas magistrorum)が成立、13世紀の20年代(1226年)、法皇により総長が信任された。パリー大学、オクスフォード大学に倣い組織が固められ、14世紀始め(1318年)スツディウム・ゼネラーレとなった。

ケンブリジにおいても学寮制をとり、オクスフォードにおとらず紳士育成に大きな成果を挙げた。現在、デグリー授与などに当る本部のほかに、20有余(女子のものを含む)のコリジを有し、学生数は1万に近い。

今日、両大学とも、国庫より約70パーセントの補助を受けているが、責任ある自治により運営されている私大であり、イギリス諸大学はすべて国営ではない。

以上の両大学のほか、イギリスには、15世紀よりのセント・アンドリュース、グラスゴー、ア

バディン (Sait Andrews, Glasgow, Aberdeen), 16世紀よりのエディンバラ (Edinburgh), 19世紀前半よりのダラム (Durham) の諸大学が現存している。

ロンドン大学 (London University) は19世紀半ば近く (1836年) 新設された、極めて近代的性格の大学である。上流階層の子弟の教養を中心課題の一つとした、古い伝統のある、そしてその校舎は蔦でおうわれた旧大学に対して、新興ブルジョア、中産階級の子女を対象とし、近代的科学と技術の研究と教育を重視している。宗教的には英国教会派との結び合いが強い。本部はデグリー授与などに当り、実際の研究と教育は散在する三十余のコリジで行われ、国庫補助よりも実業家の寄付により運営されている。実学を尊ぶ関係上、スポーツはあまり盛んではなく、学生はおおむね通学している。男女平等の共学制で、19世紀末 (1876年) には、イギリスとしては最初のこととして、女子にもデグリーが授与された。20世紀になり (1926年)、ロンドン大学法の制定を見た。なお、この大学の一つの特色である大学開放教育が極めて盛んで、現在、校内学生約3万のほかに、学外学生もそれにほぼ匹敵する学生を有している。

この上記した学外研究者、学徒に対する大学社会、成人教育は、19世紀の後半より、大学の第3の使命、すなわち、学内における研究と教育と共に、大学の蓄積する知識、技能を学外地域社会の好学者に拡大、拡散する諸活動を意味する。このような大学開放は今より約100年前より、オクスフォード大学のハーベイ (Harvey) やケンブリジ大学のスチュアート (James Stuart) などにより実験的に試みられ、20世紀初頭マンズブリジ (Albert Mansbridge) が組織した勤労者教育協会 (W. E. A., Workers' Education Association) が中心となり、ロンドン大学の協力の下に盛んとなり、今日、他の諸大学もほとんどすべて、学内成人教育部 (Department of Extramural Studies) などを設けて盛んな活動を進めている。この活動はアメリカ合州国にても極めて活発に実施され、その他、オーストラリア、ニュー・ジーランド、カナダ、ホンコンなどアングロ・サクソン系諸国においても顕著な発達を遂げている。またパリー大学などには公開講座の教授がおり、ボンには国民大学 (Volkshochschule) の連盟があり、北欧諸国にも国民大学 (People's University) が設けられるに至っている。

ロンドン大学創立以後の近代的大学としては、19世紀よりのマンチェスター (Manchester), 20世紀よりのバーミンガム、リバプール、ウェルズ、リーズ、シェフィールド、ブリストル、レディング (Birmingham, Liverpool, Wales, Leeds, Shieffield, Bristol, Reading) の諸大学があるが、いずれも大学開放教育を実施している。

イギリス大学について思うことは、コリジによる全寮制のもとに、教養科目を中心として紳士養成教育に努め、大きな効果を取めたのであるが、その後、学問体系の整備のためというよりも産業革命に伴う大規模の社会変動よりする新しい社会的必要に適應し、職業的・実務的学部の新設となったことである。

宗教的には、旧・新教間の紛争は大学にも及んだけれども、英国教会の成立と共に、大学内もおおむねこれが主流をなすに至っている。

国家との関連は深く、国費よりの多額の補助がなされてはいるが、各大学の運営は自主的に進



められており、私大であり、国家も国立とは言っていない。

以上のイギリス大学の特質の基盤をなすものは、その自主性、現実感覚性と耐久性に強いすぐれた知性を持つ国民性であると思われる。このことは、13世紀のマグナカルタの調印、それに続く議会制度の創始、そして17・8世紀よりの経験主義と功利主義の主張、更に18世後半以後の産業革命による顕著な技術革新、それに伴う職業の高度化、多様化、生活程度の高揚化に表われ、伝統固持と社会変化への適応の国民性に基くものと思われる。こうしたことはイギリス大学の成立と発展にも充分窺われるのである。

## V

アメリカ大陸とその天地は、11・2世紀よりヨーロッパ人にその存在を知られ、15世紀末（1492年）にコロンブス（Christopher Columbus）により新大陸として発見され、続いてヨーロッパよりオランダ、スペイン、フランスの諸国民、特にイギリス人の、この自由な天地への植民が開始された。17世紀後半にはイギリス植民者による東部ニュー・イングランドの建設、続いてその独立宣言（1776年）となり、爾後、旺盛な開拓精神を起動力として西進し、19世紀後半には太平洋岸まで領域を拡げた。これに相前後して、世界、特にアフリカ、ヨーロッパ、アジアの諸地域よりのおびただしい来住移民者により、豊富な天然資源は次々に開発され、商工業は盛んとなり民主・自由・平等主義の下に、新世界、新社会の建設の交響楽は進められた。

教育も重視され、初等中等教育は17・8世紀より、高等教育もほぼ同時代より始まり、次第に発展して来ている。教育と研究は始め、イギリスの伝統を踏襲したが、その後、他とは異なる国内事情、社会情勢により、新しい展開を見せ、この国特有の発達を遂げつつある。大学の成立と発展についても同様であり、大学形態としては伝統的な私営大学と新しい州立大学に分けられ、国立大学は全くない。

ハーバード大学（Harvard University）はアメリカ合州国最古の大学で、17世紀の30年代（1636年）、イギリスの非英国教会派の牧師で渡来し、富者でもあったハーバード（John Harvard）の巨額の寄付により創設された。18世紀始めまではアメリカ唯一の高等教育機関で、始めはハーバード・カレッジと呼ばれ、18世紀末頃（1780年）、ユニバーシティとなった。始め、イギリスのケンブリッジ大学の卒業生により企画、運営され、新大陸のケンブリッジ大学とも言われ、その所在地もケンブリッジ（マサチューセット Massachusetts 州）と言われている。

現在、多くの学部を持ち、学生数も多く、最も有数な大学の一つである。

イエール大学（Yale University）の前身校は18世紀の初頭（1701年）に開校されたが、18世紀始め（1718年）、富者イエール（Yale）の寄付により、現在地のニュー・ヘブロン（New Haven）（コネティカット Connecticut州）に移り、イエール・カレッジ（Yale Collge）と言われたが、19世紀来近く（1887年）よりユニバーシティとなった。

プリンストン大学（Princeton University）の前身校は18世紀中頃（1747年）ニュージャージー・カレッジ（College of New Jersey）として発足し、その後14世紀の半頃（1856年）プリン

トン (Princeton)(ニュー・ジャージー New Jersey州)に移転, 19世紀末近く (1856年)より, ユニバーシティとなった。

この大学は非共学制であり, また非宗派的でもある。学生の多くは今も学寮に起居し, 特異な私立大学として知られている。

コロンビア大学 (Columbia University) の前身校は, 18世紀の半頃 (1784年), キングス・カレッジ (King's College) として出発し, 19世紀末近く (1884年), ユニバーシティとなった。学舎はニュー・ヨーク市中に所在している。

リーランド・スタンフォード大学 (Leland Stanford University) は政治家で富者であったスタンフォードの設立したものであり, 所在地はスタンフォード (カリフォルニア California州) と呼ばれている。

ジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) は19世紀後半 (1876年), メリーランド (Maryland) 州の同名の富者により創立され, バルティモア (Baltimore) に所在する。

シカゴ大学 (Chicago University) は19世紀末近く (1892年), ロックフェラー (Rockefeller) 財団の寄付で創立された, 特色ある私大である。

カリフォルニア工科大学 (CIT, California Institute of Technology) は, その前身校が19世紀に創設され, 今より53年前に現称となった, これは, 東部のマサチューセツ工科大学 (MIT, Massachusetts Institute of Technology) と相対している。共に, 基礎学, 一般教育も重視している特色ある工科大学である。

一方, 州立大学は州民のため地方分権的にそれぞれの州に適合した高等教育機関として, 州財政の下に運営されるもので, 今日では各州に一ないし二の大学が設けられている。連邦政府より高等農工業教育発展のため, 土地を供与された農工業教育中心のものもあったが, 現在においては, その他の文化・社会科学的学部もおおむね備えている。州立大学は19世紀半ば過ぎ (1861年) のモリル (Morill) 法制定後のことであるが, 多くの州立大学の設定により, アメリカ国民の高等教育は一段と普及し, 各種の職業的, 実務的単科大学, 専門学校の発達と共に, 大衆化されるに至った。これは, この当時, 「すべての人に高等教育を」 (Higher Education for All) の強い要望と大きな運動に即応したものと言い得る。

州立大学として大きな活動をしているものは数多いが, ミシガン (Michigan), ハワイ (Hawaii) などは特に大きな活動を見せている。ミシガンは, 19世紀始め (1817年) 創立され, 4年後, 現在名となった。19世紀の中頃近く (1937年) アナバー (Ann Arbor) に移転し, 今日に至っている。ハワイは東西研究所 (East and West Center) を持ち, アジアなどからの留学生に特別な教育を与えている。

アメリカ諸大学により学外研究者, 学徒に対する大学開放教育は, イギリスに少し遅れ, 19世紀後半にはコロンビア大学, ウィスコンシン大学などにて始められ, その後顕著な発達を遂げ現在, アメリカ大学のほとんどすべてにおいて, 学外成人教育部, 継続教育部などが設けられ, 学外学生の総数は数百万人に達し, 学外学生数よりも上廻っている。

このようなアメリカ大学による学外社会・成人教育の盛んな活動は、アメリカ国民の高等教育の普及、大衆化に甚だ大きな役割を果たしている。

アメリカ大学について思うことは次の諸点である。

他の国々の大学に比較して、極めて民主的であり、平等・自由主義が貫かれている。学部制をとる総合大学は数百に達し、そのうち約半数は、ヨーロッパ諸国の大学に匹敵すると評価されている。その他職業的・実務的単科大学、専門学校を加えると約1千5百に達し、少なくとも高等教育機関の数において、またその学生数において世界において最優位を占め、また大学による学外成人教育活動も最も顕著である。

研究態度については、いわば前向きであり、たえず問題開発、問題提起と共に、問題の処理、解決に努めている。方法的には、実証的、実験的、調査的な特質が挙げられ、大きな成果を見せている。

学寮の施設はととのってはいるが、全寮制をとるものは少く、むしろ例外的で、学外よりの通学生も少くない。

連邦政府よりの財政補助は若干あるとしても、管理・指導的影響は少く、私大においては自立、自営に、州立大学においては、それぞれの州政府にゆだねられている。

以上を要約すると、世界の大学のうち、イタリア大学は大学としての萌芽生成型、フランス大学は典型樹立型、ドイツ大学は学問体系型、イギリス大学は社会適応型、またアメリカ大学は民主・実用型と言い得るであろう。これらはそれぞれ特色ある発展を遂げたものではあるが、基本においては共に高度の研究と教育に専念しており、相互間の影響も見のがし得ないけれども、今後、相互間の連繫も特に望ましい。

#### 付 記

本稿においては大学（ユニバーシティ）を主題とし、職業的、教養的単科大学、専門学校については触れるにとどめた。また新しい理念の下に新しい大学建設に努めているソ連、東欧諸国については稿を別にすることにした。

#### 参考文献

1. Albert Mansbridge, *An Adventure in Working-Class Education*, London, 1920,
2. Abraham Flexner, *Universities : American, English, German*, Oxford Univ. Press, 1930.
3. Hastings Rashdall, *the Universities of Europe in the Middle Ages*, 3vol., Oxford Univ. Press, 1958.